

学級経営ナラティブ分析法による実践の記述と解釈

—トラブル解釈と教師の語りに着目して—

所属コース 教育実践開発コース
氏名 岡田聖
指導教員 白松賢 遠藤敏朗

【概要】

本研究の目的は、教師の学級経営観やそこから生み出される教師の〈語り〉に着目し、教師の物語資源から学級経営の一つの実践知を探究することである。そのため教師の学級経営観が立ち現れている場面や教師のトラブルへの対応場面を中心に対象学級でフィールドワークを行った。すると、教師と児童とで「学級」を共に成長する「場」として認識し、共同構築過程とすることによって、学級に学級文化の創造を可能としていることが明らかとなった。また、学級経営の実践知として、様々な教育活動を単なる経験で終わらせるのではなく、物語資源としてつなぐことで、受動的な経験から能動的な経験へと質を高めるための学級文化の構成・再構成過程について一年間を通じて行い、学級に向き合う過程の重要性が明らかとなった。

キーワード 学級経営 学級経営ナラティブ分析法 物語資源

1. 問題設定

本研究の目的は、教師の学級経営観やそこから生み出される教師の〈語り〉に着目し、教師の物語資源から学級経営の一つの実践知を探究することである。

小学校学習指導要領総則には「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること」とある。このように、学級経営の重要性というのがこれまで以上に高まっているが、白松(2017, 3頁)が指摘しているように「学級経営」は教育免許法では必修科目になっておらず、学校現場で働くまでに体系的に学級経営を学ぶ機会がほとんどない。

学級経営における様々な研究では、Q-Uや学級力向上プロジェクト(田中, 2013)等が近年取り上げられてきたが、尺度や数値を用いた学級経営の成果の可視化がその中心であった。しかしながら、これらの研究は、教師と児童が共に学級を作り上げていく相互作用とそのプロセスがブラックボックス化されている。教師も児童も数値を上げていこうといった方向性を持つことで、学級は何となくまとまっているような印象になる。しかし、重要なのは、数値ではなく、教師と児童の相互作用が見られる日々の学級におけるプロセスである。教師の学級に対する不安や不満が大きいと学級がどのような状況だといった状況なのか分からないため数値化が行われることが多いが、重要なのはその不安とどう向き合うのかといった日々のプロセスであり、児童と共に学級をより良くしていこうという教師の日々の積み重ねの内実である。そのため本研究では、学級経営ナラティブ分析法を用いて、学級における教師の〈語り〉によって立ち現れる学級の変容過程について、エスノグラフィーを中

心に調査していくこととする。

2. 先行研究

1) 学級経営の概念定義

学級経営について様々な研究及び実践上の議論のある中で、研究者や教員よって学級経営の捉え方は異なっているが、本研究では、学級経営を三領域で整理する白松(2017)を参考とする。各領域について①必然的領域とは、第一の基盤となる領域で、まず児童生徒一人ひとりが人格を持った存在であることを尊重してかかわる態度を基盤とすることを意味している。②計画的領域とは、これが狭義の学級経営、すなわち授業や教育活動のための教室の秩序化を目指した条件整備を行う領域であり、わかりやすくいえば、学級において子どもたちの「できること」が増えるように計画的に指導する領域である。③偶発的領域とは、トラブルや困り事への対応のように偶発的に生じる出来事への対応を求められる領域であると説明している。本研究では、この学校・学級づくりの三領域に着目して、教師の学級経営観や学級文化の構成過程について解釈＝記述する。

2) 学級におけるトラブルと学級目標を基にした学級文化の変容過程

本研究において、学級のフィールドワークの過程で、教師の〈語り〉から生じる学級の二つの変容プロセスに関心をもった。第一が、トラブルを起点とした教師の学級への関わりである。Shiramatsu(2016)は、日本の学級経営の特徴として、学級の問題解決による学級文化の創造について、児童の自律性が重要であることを指摘している。だが、白松(2011)は、学級における「トラブル」を解決する過程がよりよい人間関係づくりの資源となるが、教育現場において学級づくりの契機と捉えることが困難であることを指摘している。よりよい学級づくりを行うためには、学級における「トラブル」をもとに、子どもたちの主体的、実践的な活動を増大させ、質的に深化・拡充しながら学級の人間関係をより良く向上させる力が教師に求められている。本研究の対象学級においても、トラブル場面を資源として、教師が児童と共に学級を見直し、よりよくしていこうとしていた。第二が、学校行事を基盤とした学級目標に関する〈語り〉によって学級の変容するプロセスである。学級目標には、教師が学級経営上設定する学級の教育目標と、教師と児童が学級活動を通じて創る学級の生活目標との二つがある。今回は、「学級の生活目標」を一つの「了解の世界」として構成する教師の語りと児童との相互作用の意義について検討することとした。この第二の問題は、特別活動研究で重視されつつも、ナラティブ研究としてはほとんど取り上げられていないため、その意味でもこの研究の意義がある。

3. 研究の方法・対象

本研究では、児童と共に学級をより良くしていこうとする教師の〈語り〉に着目し、教師の学級経営観と教師の〈語り〉に焦点を当て、学級経営に関わるナラティブを分析し解釈＝記述することで、学級経営の実践知の一つを明らかにできるのではないかと考えた。そこで本稿では、次の二つに着眼し分析を行った。第一がトラブルを起点とした語りと学級の構成過程である。第二が学級目標に基づく学級文化の再構成過程である。

本研究の分析対象は、X学校の田中先生(仮名)とその学級の児童(仮名)である。田中先生の学級で約2年間(2019年5月～2021年2月)フィールドワークを行った。主に、田中先

生が学級経営観や教師の物語資源を基に児童に語っている場面を中心に観察を行い、学級経営に関わるナラティブを解釈＝記述した。

本研究のデータ⁽¹⁾は、この期間に記録されたフィールドノート(以下、FN)と、田中先生に行ったインタビュー(以下、IN)によって得られたトランスクリプトである。

また分析の方法は、学級経営ナラティブ分析法を用いる(白松・古泉・岡田, 2019)⁽²⁾。この方法を本研究で用いることの有効性は、次の二つである。第一が田中先生の学級経営観がどのような物語資源から構成されているのかライフヒストリー調査を行うことで、明らかとなる点である。第二がその物語資源から生み出される教師の<語り>が児童にどのように浸透し、学級が変容していくのかその過程を視覚的に細やかに捉えることができる点である。

4. 研究の実践と分析

1) 「トラブル」を起点とした学級の再構成過程

田中先生は、学級におけるトラブルを「ピンチはチャンスである」と捉えており、学級を見直し、よりよくするための資源であると考えている。特に、教師のいない場面におけるトラブルを中心にナラティブ分析を行うと、主に、二つの田中先生のトラブルの解釈が明らかとなった。第一は、できる限り児童自ら問題解決を行い、トラブルを次に生かせる経験とすることで、自発的・自治的な集団づくりを行うことが重要であるといった解釈である。第二は、学級目標や約束事に関わるトラブルや児童が自ら解決できたトラブルに関しては、学級全体に共有し、学級において、自分たちで問題を解決しようとする学級文化を構築することが必要であるといった解釈である。こうした田中先生のトラブル解釈から生み出される<語り>によって、教師と児童が「トラブル」を起点とし、学級を再構成している⁽³⁾。

2) 学級目標を媒介とした学級文化の再構成過程

フィールドワークを通して、田中先生の学級経営観(学級経営の軸)について大きく三つの特徴があることが明らかとなった。それは、「1. 子どもが主役(児童の自律性)、2. 目的意識を持たせる(何のためにやるのか)、3. 失敗を成長に変える」である。そして、このような学級経営観を基に学級経営を行うにあたって、田中先生がよく児童に<語る>場面で用いるのが学級目標である⁽⁴⁾。学級目標は、教師と児童の思いにより作り出された学級の目指すべき姿であり指針である。そのため、あらゆる教育活動において、学級目標が基盤となっているという。田中先生は、教師と児童が学級目標を基盤として、一年間あらゆる教育活動を経験していく中で、学級における学級目標に三つの「しんか」(深化・進化・真価)が生まれると語られた(別紙資料1)。この学級目標の三つの「しんか」が学級において、どのように構成されるのか事例を基に整理する。まず、「深化」についてである。次の事例は、朝の会で、児童らが他の児童の話聞いていないことについて田中先生が語られている場面である。

田中先生：朝の会のあなたたちの様子を見ていて、心配になりました。人がしゃべっているのに他の人と話をしている。いやいや、今は違うでしょ。人がスピーチしているのに別のことをしている人もいる。そのためにこの朝の時間をとったんやったか？話をしている子がいたら反応してやらない。それって、学級目標にある「友達大事」ができてないことない？学級目標を目指すと言っ

ていたのは口だけなんか。あなたたちを信じてやっけてきて、できると思っていたのは先生だけですか。先生は、皆さんの朝の態度、雰囲気、聞く姿勢を見ていて少し腹立たしい気持ちでいます。今なんか皆がバラバラの方向を向いている気がして、もう一度確認しよう。友達大事って何だ？話をしている人がいたら反応をすることもそうじゃないのかな？ (2019/11月 FN)

田中先生は、このようにトラブルや学校行事といった節目ごとに、学級の実態に合わせて、学級目標を用いた<語り>を行う。そうすることで、学級目標が学級をよりよくするための資源となっている。そして、こうした教師の語りを受けて、学級において「友達大事」という学級目標が何なのか。児童らが考え、行動が変容した(別紙資料2)。次の事例は、学級において、学級目標の「進化」につながる田中先生の語りである。

田中先生：今日先生も一つ勉強になったことがあります。終わりの会の前に一生懸命掃除をしてくれている人がいました。でも終わりの会が遅れてしまったよね。やっけることは正しいけれど今やるべきことなのか。命に関わることや怪我につながるようなことは、今しないといけないよね。でも、後でいいことは、後でもいいのかなと先生は今日見えていました。けど、皆を待って、皆でやろうとして終わりの会が遅れたからそれはいい。皆がどう判断したのかが大事。なので、正しいんだけど、今かどうか考えないと学級目標にある「けじめ」っていうのはレベルアップしないよね？ (2019年/12月 FN)

学級目標である「けじめ」について、こうした<語り>を田中先生が行うことで、児童らの普段の声掛けに変化が見られた(別紙資料3)。このように、田中先生は、学級目標を媒介とした<語り>を用いることで、学級がよりよくなるために、学級に存在している学級文化を児童と共に再構成している。「真価」に関する場面は、本研究の中では観察することができなかった。

5. 結語

本研究では、田中先生の学級経営をフィールドワークする中で、児童とよりよく学級を作り上げていこうとする普段のプロセスを教師の<語り>に着目して、分析してきた。ここで、分析結果を整理し本研究で明らかになったことを検討していきたい。

まず、田中先生のトラブル解釈から生まれる<語り>や働きかけによって、児童が自ら問題解決を行い、自発的・自治的な集団づくりを目指そうとする学級文化が創造されている。また、田中先生は、人間関係づくりを学ぶ場としてトラブルを捉えており、子どもたちが、トラブルを体験して、それを次に生かせる経験とするように、物語資源としていることが明らかとなった。次に、教師の<語り>に着目したフィールドワークやインタビューによる解釈＝記述から田中先生の学級経営観と学級目標を媒介とした学級文化の再構成過程が明らかとなった。田中先生は、学級経営において主に三つのことを大切にされており、児童らとの想いの相互作用を通じて、共通に構築する学級の生活目標が学級目標となっている。そして、学級目標を資源として児童に<語る>ことで、学級目標の三つの「しんか」を児童に促している。特に、教師と児童が学級におけるトラブルや学校行事を振り返る際に学級目標を用いることで、目標に表象される教師や児童の考えや認知を変容させながら、物語資源として深化・拡充させていた。また、教師と児童とで「学級」を共に成長する「場」として認識

し、共同構築過程とすることによって、学級に学級文化の創造を可能としていた。

今回の田中先生の学級におけるフィールドワークを通して、教師の学級経営の実践知として明らかとなったことは次のようなものである。それは、学級におけるトラブルや学校行事を児童の成長のための契機として捉え、教師の〈語り〉により、学級や個人を振り返り、よりよくしようと成長するための言語資源と相互作用を与える過程である。また様々な教育活動を単なる経験で終わらせるのではなく、物語資源としてつなぐことで、受動的な経験から能動的な経験へと質を高めるための学級文化の構成・再構成過程について一年間を通じて行い、学級に向き合う過程の重要性である。

最後に、本研究は学級経営ナラティブ分析法を用いて、教師の〈語り〉に着目し、教師の実践知を探ってきたが、その解釈＝記述にはまだまだ課題があり、今後もより多くのドキュメントを分析することで、教師の実践知を解釈＝記述していきたい。

〈注〉

- (1) 本研究は、JSPS 科研費 JP19K21776(白松代表)の助成を受けた調査で得られたデータであり、そのデータを用いて分析を行っている。
- (2) 学級経営ナラティブ分析法については、白松・古泉・岡田(2019)で報告しているため詳しくは、そちらを参照して頂きたい。
- (3) 「トラブル」を起点とした学級の再構成過程の詳しい内容に関しては、岡田・白松(2021)にて、報告しているためそちらを参照して頂きたい。
- (4) 田中先生の用いる学級目標は児童と共に創り上げている学級の生活目標である。

〈主要引用・参考文献〉

- 岡田聖・白松賢(2021)「学級経営ナラティブ分析法の検討—教師の語りと児童の関わりに着目して—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第66巻(予定)。
- 白松賢(2011)「人間関係づくりと『トラブル』の問題化」『フロント教育研究』No. 873, 68-71頁。
- 白松賢(2017)『学級経営の教科書』, 東洋館出版社。
- 白松賢・古泉啓悟・岡田聖(2019)「質的調査法を用いた臨床的教育方法の探求—試行的実践としての学級経営フィールドワーク—」『愛媛大学教育学部紀要』第61巻, 71-78頁。
- 田中博之(2013)『学級力向上プロジェクト』, 金子書房。
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説総則編』, 東洋館出版社。
- Shiramatsu, Satoshi. (2016) “A Case Study of Developing “Classroom History” for Creative Classroom Management in Japanese Elementary Schools”, *Bulletin of the Center for Education and Educational Research*, the Faculty of Education, Ehime University, 34, pp.19-24.

〈別紙資料〉

資料 1

田中先生：やっぱりうちの学級は、学級目標が根源なんよ。根元になる部分よね。学級目標には、3つの「しんか」がある。学級目標を子どもたちと決めて進んでいくと、まず「しんか」の1つは、「深化」この学級目標は、一体何なのかここを考えさせることで、本当の意味が見えてくる。色んなトラブルとか行事で節目節目に振り返って、子どもたちと見つめ直すことで、学級目標が深まる。次に2つ目は、「進化」なんよ。次の活動に向けてこうしていこうと目的意識を持ってやることで、何か1つプラスされていく要素が入ってくる。最後に3つ目は「真価」よく子どもたちに言うんやけど、真の価値。学級目標のここがいいよねって。この学級目標がこれからの人生や学校生活において価値があるんだと真価に気付けるようにする。深めて、どんどん先に進んでいって、その価値に気付く。そして、この先の10年後、20年後の人生につなげたい。

(2020/12月IN)

資料 2

朝の会の様子を観察していると、児童の様子に変化が現れてきた。

朝の会の途中で、おしゃべりをしている児童に対して

藤本君：静かにしよう。今はそれをするときじゃないよ。

そう言うと、注意された児童以外もおしゃべりをやめ、話をしている児童の方を向いた。

亀山君：次は、日直のスピーチです。

日直がスピーチを始める。他の児童は、首を振ったり拍手をしたりそれぞれのやり方で反応をしていた。

田中先生の学級目標を媒介とした語りが児童に浸透し、児童の中で〈語り〉に変容が生まれ、行動が変わった児童が増えている。

(2019/12月FN)

資料 3

朝の時間を使って、掃除の担当を自分たちで決めている場面である。

森田さん：これから掃除場所を決めます。雑巾をやりたい人…。

児童ら：はいはいはい。(6人の児童が手を挙げた。)

このように順番にじゃんけんをしながら決めていく。その時に、話をされていて聞いていない児童らがあった。

森田さん：門田君とか話聞いてますか？

それでもまだ、聞こえていないのか反応がない。

阿部さん：ねえ、ちょっと話聞いとる？今は掃除の担当を決めてるんやから話聞こうよ。

この様子を教室の外で、見ていた先生からこの後お話があった。

田中先生：先生さっきの様子を外で見ていたんだけど、話を聞いていなかった子に今は話を聞くときよって声をかけてくれている子がいましたね。掃除の担当を決めてくれていたクリーン係さんの人たちは、すごく助かったと思います。こういうこと合唱コンクールのときもあったよね。パー

リーダーさんが一生懸命やってるのに、おしゃべりをしていて練習の時間が無くなるとか。今日みたいに、まわりの子が助けてくれると学級目標の「友達大事」や「けじめ」にもつながりますね。先生が聞いていると、何人かの子がそういう声かけをしてくれていてね。あーこの学級がちょっとレベルが上がる「友達大事」や「けじめ」に向かっているなと思って、嬉しくなりました。

(2019/12月 FN)